九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[2018/2019] 九州大学附属図書館研究開発室年報表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2327994

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2018/2019, 2019-07. Kyushu University Library
バージョン：
権利関係：

平成 30 年度における研究開発

1　図書館による学習・教育支援に関する調査研究

室　　員　冨浦　洋一（附属図書館副館長，システム情報科学研究院教授）
石田　栄美（附属図書館研究開発室准教授）
内山　英昭（附属図書館研究開発室准教授）
山田　政寛（基幹教育院准教授）
担当窓口　斎藤　未夏（利用者サービス課長）
渡邊由紀子（学術サポート課長）

＜研究開発の概要＞
九州大学における学習・教育活動と連携した新たな教育支援のあり方について調査研究を行う．

＜研究開発の内容＞
1. 九州大学における学習・教育活動と連携した新たな教育支援についての調査研究（冨浦，石田，内山，山田，職員）
教育改革の推進を目的とした学内プログラム「教育の質向上支援プログラム(Enhanced Education Program：EEP)」に採択された，附属図書館の3ヵ年プロジェクト「教育の国際化に対応した学修支援環境の構築ーアクティブ・ラーナー育成を推進する次世代の大学図書館をめざしてー」は平成29年度に最終年度を迎え，事後評価において「A 期待どおりの成果が得られている」の結果を得，EEPによる取り組み全体の中でも特に高く評価された．
平成30年度はEEP終了に伴い，図書館TA（以下，Cuter）の指導体制を見直し，附属図書館研究開発室の下に「学習・研究支援WG」を組織した．また，大学の移転完了に伴う附属図書館の事務組織改編により，学術サポート課が新設された．Cuterと連携した授業外学習・教育支援体制を一層強化し，以下の事業を実施した．

1) Cuterとの協働による学習支援
Cuterによる具体的な学習支援活動として，以下を実施した．
①学習相談デスクでの案内・指導…Cuterが計119件の学習相談に対応した．
②講習会等の講師および補助…Cuterが内容設計・教材作成・講師を務める講習会を計35回開催し，延べ697名の受講があった．
③Web上の学習ガイドの作成…Cuterによる新規ガイドを13件追加した．
④学生交流イベントの企画・実施…学部・学府・学年の垣根を越えて研究交流を図る学際交流イベントを計11回開催し，延べ193名の受講があった．また，Cuterが選書した資料を展示するイベントを計10回実施した．
2) 教育の国際化に対応した図書館利用教育の拡充
文献検索および文献管理について，留学生を対象とした英語による講習会を実施した．加えて，新入留学生を対象とした英語と日本語による図書館ツアーを各キャンパスで前期・後期の計2回実施した（病院地区は後期のみ）．中央・伊都（理系）・芸工・医学の各図書館において，図書館職員だけでなく，Cuterがツアーコンダクターを務めた．
3) 基幹教育支援の業務移行と見直しの実施
基幹教育支援業務について，業務内容を整理しマニュアル等の整備を行った上で，伊都図書館参考調査係から中央図書館学術サポート課学習・研究支援係へ移行した．これに伴い，基幹教育の授業で使用する資料を集約した「課題文献コーナー」を，伊都図書館から中央図書館4Fアクティブラーニングスペース「きゅうとコモンズ」に移設し拡充したほか，基幹教育担当の教員と連携し，資料の整備やWeb上の文献ガイドの作成

を行った．
4) 基幹教育支援の拡充
平成29年度に引き続き，学部1年生を対象とした「レポートの書き方講座」「実験レポート講座」「プレゼン講座」を開催した．うち，実験レポート講座については，eラーニング教材を作成し，M2Bシステムを利用して公開した．また，平成30年度高年次基幹教育科目の前期集中講義「レトリック基礎」「プレゼンテーション基礎」において，Cuter2名が授業計画の段階から協力し，当日の講義補助を行った．さらに，全学部の新入生が受講する必修科目「課題協学」のガイダンスにおいて，図書館職員が図書館の概要を説明した．
5) 学習支援を推進する人材育成
図書館職員およびCuterの人材育成を促す取り組みとして，以下を実施した．
・教育改革推進本部ラーニングアナリティクス部門の依頼に基づき，Cuterによる学習支援の中に，M2Bシステムの利用支援を位置づけた．これに伴い，CuterがM2Bシステムの使い方に関する質問に対応するため，M2Bシステムに関する講習会を受講した．
・キャンパスライフ・健康支援センターの依頼に基づき，多様なニーズのある学生への対応に関する研修会を実施するとともに，対応ガイドラインを策定した．これらに基づき，Cuterが特別な配慮を必要とする複数学生に対する学習相談に応じた．
・国際ワークショップALIRG2018において，図書館職員がCuterとの協働による授業外学習支援の取り組みについてポスターによる研究発表を行い，ベストポスター賞を受賞した．
・九州地域大学教育改善FD・SDネットワーク主催Q-Conference2018に，Cuterによる学習支援の取り組みに関するポスターを出展し，図書館職員と共にCuter2名が参加した．

2. 学習支援を目的とした調査研究（内山）
学生の講義内容に関する関心の深化を目的として，デジタル教材配信システムBookRollで九州大学図書館・図書室が所蔵している図書の推薦を実施した．BookRollは教材を表示するウェブアプリケーションで，学生は講義中ならびに予習・復習時に利用している．教材の各ページの閲覧，ブックマーク，メモといったウェブアプリケーション上での行動は，学習ログとして記録され，教育・学習の向上のために利活用されている．本取り組みでは，BookRollで閲覧されている教材ページと関連がある図書を，BookRoll上で推薦する．教材ページと類似度が高いタイトルをもつ図書が推薦される．2018年11月から2019年2月までのあいだに，延べ3528名の学生から47回のクリックを得た．そのうち1冊の書籍が，クリックした学生であるかどうかは不明であるが，貸し出されたことが観察された．クリック数が少ない原因として，BookRollのインタフェースで推薦に気がつきにくい，ということが理由として挙げられるので，インタフェースの改良が必要である．また，クリックされた推薦のうち35%は，教材ページと関連が薄い図書である．よって，推薦を計算する際に，セレンディピティといったその他の要素についても検討する必要がある．なお，本研究は京都大学付属図書館研究開発室の西岡千文助教と九州大学システム情報科学研究院の島田敬士と行った．

２　図書館による教材開発および著作権処理に関する調査研究

室　　員　岡田　義広（附属図書館付設教材開発センター教授）
　　吉田　素文（附属図書館研究開発室特別研究員）
協力教員　金子　晃介（サイバーセキュリティセンター准教授）
担当窓口　新山　明子（図書館企画課課長補佐）

＜研究開発の概要＞
インストラクショナルデザインに基づいた教材，教育方法の研究開発と，教材作成にかかる著作権処理問題について調査研究を行う．

＜研究開発の内容＞
1. 部局と連携した教材開発

・人文科学研究院との連携による日本史学（宮中儀礼），中国文学（鴻門之会，史記）の電子教材，歯学研究院との連携による歯科治療トレーニング用電子教材，および医学研究院との連携による放射線治療トレーニング用電子教材などの3DCGやAR/VRを活用した電子教材の開発を継続実施した．また，過年度に開発した骨学Web教材の英語化を実施した．
・授業科目の英語化支援の一環として，基幹教育総合科目「情報科学」英語版の小テストの英語化を実施した．また，前年度にキャンパスライフ・健康支援センターと連携し開発した「メンタルヘルスケア」教材と，留学生センターと連携し開発した「漢字学習用Web教材」の利用状況調査を実施した．

2. MOOCの開講
　平成26年度から教材開発センターが所有する独自のスタジオでMOOCコンテンツ制作に取り組んでおり，平成29年度に制作した丸山宗利准教授の「昆虫学入門 -多様性を探る」を平成30年7月23日～8月20日に開講した．受講者数1,606名で50%を超える修了率を達成した．また，新たに2件(理学研究院・森田浩介教授，工学研究院アジア防災研究センター・三谷泰浩教授)の取組みを開始した．三谷教授の「豪雨災害とその対策―平成29年7月九州北部豪雨災害を例に―」はプロモーションビデオの撮影まで完了した．

3. 電子教材著作権処理に係る取り組み
・教員が作成した電子教材の授業利用やネット配信する際の著作権処理の考え方等を共有する目的で，電子教材著作権講習会(全学FD)を各キャンパスにおいて開催した．
・平成26年5月の設立時から参加している，大学学習資源コンソーシアム(CLR)において活動を継続している．平成30年5月18日に著作権法一部改正の法律が成立し，これに対応するために新たに設置された著作権法改正対応ワーキンググループ(主査 : 吉田室員)のメンバーとして活動した．このワーキングでの活動内容を電子教材著作権講習会の内容に反映させている．

３　九州大学所蔵資料および資料保存に関する調査研究

室　　員	川平　敏文	（人文科学研究院准教授）
	和仁　かや	（法学研究院准教授）
	中里見　敬	（言語文化研究院教授）
	永島　広紀	（韓国研究センター教授）
	三輪　宗弘	（附属図書館付設記録資料館教授）
	梶嶋　政司	（附属図書館付設記録資料館助教）
	古賀　康士	（附属図書館付設記録資料館助教）
	Wolfgang Michel	（附属図書館研究開発室特別研究員）
職　　員	山根　泰志	（図書館企画課企画係）
	梶原　瑠衣	（図書館企画庶務係）
	羽賀真記子	（収書整理課図書受入係）
	佐方　小弓	（収書整理課図書受入係）
	原賀可奈子	（eリソース課eリソース管理係）
	中村　智晴	（学術サポート課学習・研究支援係）
	西　真里恵	（利用者サービス課参考調査係）
	吉丸　梓	（利用者サービス課理系参考調査係）
	相部久美子	（医学図書館閲覧係）
	宮嶋　舞美	（医学図書館相互利用係）
	古賀　京子	（情報システム部情報基盤課医学図書館デジタルライブラリ担当）
担当窓口	山口　良子	（収書整理課長）
	児玉　浩憲	（eリソース課専門職員）

吉松　直美 （医学図書館専門員）

＜研究開発の概要＞

九州大学が所蔵する貴重資料，コレクション等について，由来や内容，価値等の調査や，画像及び書誌データベース作成等についての調査研究を行うとともに，図書館における資料保存・管理体制等についての調査研究を行う．

＜研究開発の内容＞

1. 雅俗文庫の公開

中野三敏名誉教授の旧蔵書である「雅俗文庫」は，平成21年度に購入，その後2度にわたった寄贈を経て，和装本資料8,300点以上， 洋装本資料約4,400点と，その他の資料群からなるコレクションである． 川平敏文室員の指導のもと，人文科学研究院の研究員・大学院生とともに，平成22年度から継続して書誌情報の採取・データ入力を実施し公開している．

平成30年度は，和装本約1,900点について図書館システムへの登録を実施．平成28年9月より着手した書誌情報の採取についても，引き続き実施した．平成29年度に整理を終えた洋装本は，全面開館した中央図書館1階のブックウォールに配架され利用に供されている．

電子化については，科研費挑戦的研究(萌芽)「デジタルヒューマニティーズを促進するオープンデータ環境およびシステム基盤の構築」により122冊，九州大学P&P(つばさプロジェクト)により71冊の計193冊を実施した．

2. 植民地関係資料の整理

1919年（大正8年）に国内で三番目に設置された本学農学部においては，帝国大学期に樺太・朝鮮・台湾に 附属演習林を持ち，アジア地域に近接した基幹大学として農学関連の資料収集を行ってきた．これらの資料群の中には旧植民地関係資料の希少価値が高い文献が含まれており，内容も経済，社会，気象，貿易，交通 等と多岐に渡っている．

平成29年度に約3,800点に及んだ整理が完了し，平成30年度には理系図書館(旧伊都図書館)地階へ移設配架され，利用に供されている．

3. 濱文庫所蔵戯単・レコードのデータベース化

科研費基盤研究(B) 「濱文庫所蔵戯単・レコードのデータベース化と保存法の改善」（平成28～32年度）により，濱文庫に所蔵される戯単およびレコードのデータベース作成，解説執筆を進めた．平成30年度はとくにレコードの音源，ジャケット，歌詞カードのデジタル化を行い，濱文庫所蔵レコード目録作成に向けた準備を行った．

また，平成31年3月に花書院から『『春水』手稿と日中の文学交流：周作人，謝冰心，濱一衛』が刊行された．濱文庫で『春水』手稿が発見されたのを機に開催した国際シンポジウムの成果を収録した論文集であり，宮本一夫館長の序文以下，国内外の15名が執筆した．

4. 医学図書館関係

平成30年度は次の文庫類の調査・整理と展示を行った．整理を終えた資料は，九大コレクション上で文庫として紹介し，書誌・所蔵データを公開した．

1）三宅速文庫の整理

三宅速,京都帝国大学福岡医科大学第二外科学教室初代教授は，大正11年に洋行した帰国時の船内で，アインシュタインを診察・治療したのを機に親交を深め，アインシュタイン来福時には自宅にも招待したと知られている．未整理であった三宅速旧蔵書を，文庫として目録整理し「三宅速文庫」コーナーを設けた．

2）小野寺精喜文庫の整理

九州帝国大学医学部内科学第3講座教室助教授小野寺精喜（九州帝国大学医学部初代内科学第3講座教室教授小野寺直助の義息）の旧蔵書及びノートを文庫として目録整理し「小野寺精喜文庫」コーナーを設けた．

3）県立福岡病院文庫の整理

「九州帝国大学医学部」前身の「京都帝国大学福岡医科大学」の母体である「県立福岡病院」の旧蔵書について，保存書庫分を調査した．「県立福岡病院文庫」として整理し，保存書庫内にコーナーを設けた．

4）ミヒェル文庫の追加受入

元九州大学大学院言語文化研究院長で九州大学名誉教授ヴォルフガング・ミヒェル（Wolfgang Michel/Michel-Zaitsu）が収集した蔵書459点が平成30年度に医学図書館に寄贈された．資料保存のため低温殺虫処理を行ったうえで受入リストを作成した．既存のミヒェル文庫に加える形でこれから目録整理を行う予定である．

5）櫻井恒次郎文庫のミニ展示

「九州帝国大学医学部解剖学教室」教授櫻井恒次郎の旧蔵書「櫻井恒次郎文庫」を紹介するミニ展示を平成31年3月15日から3月31日まで医学図書館１階入口ホールで行った．

5. 記録資料館関係

1）産業経済資料部門

記録資料館産業経済資料部門の所蔵資料（約7,000箱）の新キャンパス移転のため，移転リストの作成や保管状況の記録，標本資料の梱包作業などの必要な処置を行った．産業経済資料部門の所蔵資料については，平成30年年7月25日より資料移転を開始し，9月30日に移転作業を完了した．

調査研究に関しては，麻生家文書・麻生商店資料の来歴などを調査したほか，近世海難史料などを含む和歌山県古座町役場旧蔵文書（九州文化史資料部門所蔵）について細目録を作成した．

2）法制資料部門

附属図書館ウェブサイト所蔵コレクション「法制史料」において，記録資料館法制資料部門所蔵の法制史料の目録（エクセルファイル）が公開されており，その目録データは，九大コレクション貴重資料においても公開されている．移転準備作業のための整理及び悉皆調査により，目録データの誤りや目録に収録されていなかった史料があることが判明したため，それらの調査を反映した目録の改訂版を公開した．今後は九大コレクション「貴重資料」において公開されているデータの差し替えを予定している．

6. 資料保存関係

1）研修への参加

国文学研究資料館・国立国会図書館主催で行われた平成30年度日本古典籍講習会に職員1名が参加し，4日間の日程で日本古典籍の基礎知識や書誌学の専門知識・整理方法の技術習得を目的とした講義・実習を受講した．

2）移転に伴う資料保存対策

前年度に引き続き，移転対象資料のクリーニングを順次実施した．職員によるクリーニング作業にあたっては，班員が指導・助言を行った．さらに，研究室からの返却資料や文庫資料を中心に，冷凍庫を用いた低温殺虫処理を継続して実施した．

また，資料移転の完了に合わせて温湿度モニタリングの範囲を拡大し、新中央図書館における書架環境の把握体制を整備した．

3）貴重書・準貴重書利用に際しての「資料閲覧に際してのお願い」を作成

新中央図書館への移転と，新しい貴重図書室及び準貴重図書室の運用開始を機に，利用者向けの取り扱い説明文書「資料閲覧に際してのお願い」（貴重書版／準貴重書）をまとめた．新中央図書館の開館後は，この文書を使用して貴重書の閲覧に際する利用指導，並びに準貴重書室入室のための事前レクチャーが行われている．

４　図書館に係る学術情報の流通および発信に関する調査研究

室　　員　冨浦　洋一（附属図書館副館長，システム情報科学研究院教授）
内山　英昭（附属図書館研究開発室准教授）
畑埜　晃平（基幹教育院准教授）

廣川佐千男　（情報基盤研究開発センター教授）
伊東　栄典　（情報基盤研究開発センター准教授）
池田　大輔　（システム情報科学研究院准教授）
担当窓口　堀　　優子　（eリソース課長）

＜研究開発の概要＞

学術情報資源をより効果的に発信するために，発信機能の高度化と検索システムに関する研究開発を行う．

＜研究開発の内容＞

1. 汎用的なデータリポジトリについての研究開発（池田）

様々なデータを分野外の人でも簡単に使えることを目指し，データ流通基盤の概念的なフレームワークを提案する研究プロジェクト(科研基盤(B))を実施した．検索という簡便な手法でフレームワークを個別化し，分野別のリポジトリが得られる点が独創的で，フレームワークは分野を越えた学術情報流通基盤となることが期待できる．

これを達成するために，学術情報流通の基本的な仮説を設定し，これを検証する仮説検証型で研究を進める．仮説にあたる(1)フレームワーク，これを検証するプロトタイプを(2)データと(3)インターフェイスに分けて研究を進めてきた．

(1)のモデル化として，調査したクラウド上で主に位置とその関連情報を集積する既存システムを用いて，小規模なプロトタイプ（考古学，伝統料理の保存）を複数構築した．同じプラットフォームで異なるシステムを比較的簡単に構築できることを確認した．

(2)について，機関リポジトリ等で公開されている論文から，自動的に関連するデータセットを特定し，論文からメタデータを自動的に抽出するアルゴリズムとプロトタイプを構築し，国際会議で発表した．当初は特定のデータセットを仮定したものだったが，一般のデータセットに拡張したものを実装し国際会議に投稿し，受理された（発表予定）．

(3)について，多様なデータを確認できるビューワを開発し，専門家や教育分野においてユーザビリティを評価した．さらに，図やグラフなどのチャートも一種の二次データと考え，これを人間が可読なクエリ文字列で管理するシステムを実装し，再現・共有を容易とする新たな方法を提案した．クエリ文字列には，データの選択や処理手順などが明記されているため，研究の再現性の担保にも重要である．

2. 検索結果の網羅性が高い学術論文の検索手法の開発に関する研究（冨浦）

新規性の確認のための学術論文の検索においては検索結果の高い網羅性が重要である．80% や 90% といった高い網羅性を保証しつつ，検索結果の精度（Precision）を極力高めるための手法の開発を行った．具体的には，トピック分析を利用して検索クエリをトピックベースの検索に変換した手法，これと従来のトピック分析を利用したランキング手法（LDA-Based Document Model による手法）との組み合わせ，適合性フィードバックによるキーワードの推薦手法について研究した．

3. 古い紙媒体の資料のテキスト化に関する研究（冨浦）

紙媒体で保存されている現代史資料や古い新聞などを用いた研究における資料へのアクセス性を向上させることを目的として，スキャンしたイメージデータをOCRでテキスト化し，さらに，OCRの誤りを考慮した検索手法や情報抽出やその可視化に関する研究を進めている．今年度は，資料の色あせ等の劣化に頑強なテキスト化の手法として，イメージデータの前処理による前景／背景への二値化を試みた．

4. 研究者・研究データ管理に関する調査（内山・芦北）

研究者・研究データを管理する枠組みとして，ORCID (Open Researcher and Contributor ID)の機能及び利活用の現状について調査した．ORCIDの理念は，世界中の研究者にユニークなIDを割り振り，論文や研究費，さらには勤務歴とも関連付けることで，研究者に関するデータを永続的に管理することである．日本国内にはresearch mapや各大学のデータベース等に管理されているが，ORCIDはこれを世界的に統一することを目的とした団体である．ORCIDのID自体は各研究者が自由に取得可能であるが，学内でORCIDのIDを使った

研究者の情報管理を行うためには，ORCIDに団体として加盟することが望ましい．現在，国内ではいくつかの大学がORCIDに登録がされているが，欧米に比べると非常に少ない．大学がORCIDに加盟するメリットは，学内研究者の前職からの業績等を一括して取得したり，学内研究者が大学で働いていたことを証明したりすることが可能となることにある．世界のトップ20の大学のほとんどがORCIDに加盟しているといったこともあり，ORCIDを利用することで，情報管理業務を効率化することが期待できる．今後は，学内でのORCID取得を普及させるための枠組みや，学内でのORCIDの利活用について検討を進める．

５　図書館における高度専門知識を有する人材育成に関する調査研究

室　　員　　石田　栄美　（附属図書館研究開発室准教授）
　　岡崎　　敦　（人文科学研究院教授）
担当窓口　　瓜生　照久　（図書館企画課長）
　　渡邊由紀子　（学術サポート課長）

＜研究開発の概要＞
図書館職員の専門性および次世代を担う情報専門職の育成をはかるための調査研究を行う．

＜研究開発の内容＞
1. シンポジウム等の開催
1) 国際シンポジウム「高等教育の国際化と大学図書館：アジアを拠点としたトップブランドへ」
平成30年12月14日（金）に，九州大学伊都キャンパス完成記念，中央図書館グランドオープニング記念行事として，高等教育の国際化と大学図書館をテーマに国際シンポジウムを開催した．
本シンポジウムでは，平成30年10月1日に全面開館した国際化の拠点となる中央図書館にて，九州大学の事例を紹介するとともに，Kulthida Tuamsuk氏（タイ王国 コーンケン大学人文社会科学部准教授）およびHao-Ren Ke氏（台湾師範大学情報学研究所教授）による，同国の大学図書館における国際化支援の先進的な取り組みについての講演が行われた．アジアから多数の高等教育機関関係者の参加があり，パネルディスカッションでは闊達な意見交換が行われ，今後大学図書館が国際化の面で高等教育に不可欠な存在であり続けるため，その役割や意義等について見識を深める機会となった．本シンポジウムはALIRG 2018 (10th Asia Library and Information Research Group Workshop)のプレイベントにも位置付けられている．
なお，講演資料は九州大学学術情報リポジトリ（QIR）より公開している．
https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/news/symposium-201812
2) ALIRG2018（10th Asia Library and Information Research Group Workshop）
平成30年12月15日（土）に，アジア各国から図書館情報学分野の研究者が集うAsia Library and Information Research Groupのワークショップを開催した．中央図書館4階きゅうとコモンズを会場としたポスターセッションでは，附属図書館からも3点のポスターによる研究発表を行った．そのうちの1点， Cuterとの協働による授業外学習支援の取り組みには，特に多くの質問が寄せられ， Cuterと図書館職員の能動的な姿勢が評価されるなどし，ベストポスター賞を受賞した．
3) シンポジウム「オープンデータと大学」
平成30年1月30日（水）に，オープンデータ，デジタルヒューマニティーズに興味を持つ研究者，学生，図書館・文書館等の職員を主な対象としたシンポジウムを開催した．特に人社系研究を対象とするオープンデータの射程について，具体的な制度，管理運営上の課題とも関連づけながら，現状を整理するとともに，課題について検討し，認識の共有をはかった．登壇者による各報告では，国内の先端的な取り組みが紹介され，活発な意見交換がなされた．

６　新たなサービスの創出に関する調査研究

室　　員　石田　栄美（附属図書館研究開発室准教授）
内山　英昭（附属図書館研究開発室准教授）
畑埜　晃平（基幹教育院准教授）
担当窓口　瓜生　照久（図書館企画課長）
斎藤　未夏（利用支援者サービス課長）

＜研究開発の概要＞

図書館利用状況の分析や国内外図書館の視察等にもとづき，新たなサービスの創出に関する調査研究を行う．

＜研究開発の内容＞

1. 海外の大学図書館との連携，訪問調査

タイ王国 コーンケン大学人文社会科学部准教授 Kulthida Tuamsuk 氏および台湾師範大学情報学研究所教授 Hao-Ren Ke 氏を招聘し，国際シンポジウムを開催した．